

歴史探訪 Part II - ⑭

江戸川木材工業株式会社

顧問 清水 太郎

去る11月19日、ろんどの会 幹事 権田様の紹介により、西国分寺駅前にある、いずみホールで催された、「OPERA 業平」を観に行きました。私の『伊勢物語』についての知識は高校時代古文の授業で習った程度であります。

そこで、角川文庫発行の『伊勢物語』(付現代語訳)を買い求め繙いてみますと、私が学んだことは、全125段中の第9段のみであることが分かりました。著者(主人公?)在原業平は、51代平城天皇の孫に当り、平安時代(825-880)六歌仙といわれた和歌の達人で、「ちはやぶる神代もきかず竜田川からくれなゐに水くくるとは」は小倉百人一首にも選ばれており、『伊勢物語』は千年以上愛読された名作であります。

業平が東下りで、八橋のある水辺に美しく咲いている杜若(かきつばた)を見て、同行の人が、「かきつばた」という5文字を各句の上に置いて詠め、と云われ詠んだ和歌が、「唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ」であり、人々は乾飯(かれない 保存食)の上に涙を落として、乾飯はふやけてしまいました。

武蔵の国と下総の国の境に流れている隅田川を渡る際、嘴と足が赤い嶋と同じ大きさの鳥の名を船頭にきいて、都鳥と知り、「名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」と詠んだ処、舟こぞりて泣きにけり。この件(くだり)が親しく読まれて、後世になって隅田川に架けられた橋を言問橋と命名されました。

～いざ読る『伊勢物語』の世界～

OPERA 業平 Narihira

自原業平：林 寿宣  
 舞臺：高子麗(二あゆみ)：安本 信彦  
 軍國の體、鳥の聲：田中 藤由希  
 台詞：コンセールde Narihira

能「小槓」による  
 二幕のロマンティックオペラ

2017 11/9 (木) 開演15分前

2:00pm 2部公演  
 7:00pm

国分寺市立 いずみホール  
 11月9日(木)開演15分前

チケット料金 8000円 前売り 6500円 65歳以上 4000円 学生 3000円 全席自由

チケット申し込み：t:narihira@accor-net.jp  
 マネジメント・お問い合わせ：武蔵音楽事務所、TEL:042-650-1378

主催：西山文化を振る会 後援：国分寺市立文化センター

～いざ読る『伊勢物語』の世界～

OPERA 業平 Narihira

2017 11/9 (木) 開演15分前

2:00pm 2部公演  
 7:00pm

国分寺市立 いずみホール  
 11月9日(木)開演15分前

チケット料金 8000円 前売り 6500円 65歳以上 4000円 学生 3000円

チケット申し込み：t:narihira@accor-net.jp  
 マネジメント・お問い合わせ：武蔵音楽事務所、TEL:042-650-1378

東武鉄道が浅草駅から日光方面に走っておりますが、2番目の駅はスカイツリーが完成し、とうきょうスカイツリー駅に変わる数年前までは業平橋駅でありました。

業平が東下りに出掛けるきっかけが、第4段「月やあらん」で語られております。清和天皇に入内する前の二条の后が高子(たかいこ)であったとき、業平と熱い恋愛の末逃避行に及ぶも、藤原を名乗る朝廷の要職にあった兄に連れ戻されて叶わず、悲嘆にくれて都落ちし、生きる場を探して旅立ちました。

OPERA 第一幕の舞台となった京都西山大原野は桜の名所として知られており、西行法師ゆかりの「花の寺」として名高い勝持寺があります。南部には小塩山があり、この地を舞台とする能があります。能「小塩」は弥生の花盛りで、都からやって来た一行が花見を楽しんでいたとき、桜の枝を手にした翁が現れ、「大原や小塩の山も今日こそは神代のことも思い出づらめ」と不思議な和歌に言及します。都人たちがその作者と歌意を老人に問います。

老人は業平の老いた姿であり、歌は業平が若いとき、二条の后の大原野御幸に供奉した折に、後に奉った一首で、後の入内前、高子のとき、契をかわした思い出と、昔と変らぬ恋心を隠したものでありました。

第二幕は若き業平は狩衣装束に初冠と追懸、入内前の后高子は十二重姿と、典雅な姿で現れ、業平は「月やあらぬ、春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」(月が昔のままの月でない、春が昔のままの春でない、そんなことがあるか — わが身だけが昔のままのわが身であって —)と謡い、昔を偲ぶ舞を舞いつつ夜明けと共に消え失せてゆきます。

このOPERAを作曲するに際し、日本語を西洋音楽の旋律に乗せる為には木に「竹を接ぐ」如き膨大なエネルギーが必要であったことであらう。「言葉と音楽の摩擦を最大限回避できたのは、台本が能仕様であったために他ならない。」と追手門学院大学教授で作曲家の角田展弥氏の解説に述べられておりました。

今日のOPERAは、自宅に能楽師一家をお招きして、披露させる程和様芸術に造詣の深い権田様のご紹介で実現できました。今後この貴重なご縁を大切にしたいと念じております。

#### 近世史「培われた学問の家風田安徳川家」より

享保の改革を主導した8代将軍吉宗の二男宗武が江戸城内の田安台に屋敷を賜り成立した田安家は、延享3年(1746)、摂津、和泉、甲斐、播磨、武蔵、下総の6ヶ国のうち、10万石の賄料を拝領しました。田安家は、一橋家、清水家と合わせて御三卿と云われました。田安家は英明の誉れ高い初代宗武の没後、嫡男治察(はるあき)が継承し、その死後一橋治済(はるさだ)の五男斉匡(なりまさ)が3代を相続してからは、11代将軍家斉の十四男斉荘(なりたか)が4代、斉匡の九男慶頼(よしより)が5代、慶頼の長男寿千代(ひさちよ)が6代、慶頼の三男亀之助が7代と、吉宗以来の将軍家の血統や学芸を重んずる家風を連綿と受け継いで行きました。

初代宗武が21才のとき、享保20年(1735)12月、関白近衛家久の息女森姫と結婚しました。森姫は和歌を嗜み、田安徳川家に宮廷文化の粋をもたらしました。延享3年(1746)田安家に出仕した国学者賀茂真淵は50才のとき、宗武の著した『国歌八論余言』に接してはじめて歌の意を知り、万葉主義の指標を掲げました。

宗武には七男八女、十五子がありましたがそのうちの1人定信は白河藩主松平定邦の養子となり、老中にまで昇りつめ、田沼親子の賄賂政治を糾すべく寛政の改革を断行しました。

林子平、蒲生君平、高山彦九郎は「寛政の三崎人」と云われました。崎人の崎とは区画整理された井田の余りの部分をいいます。よって「崎人」とは世間の規格常識からはずれた変わり者、変人の類であります。

伴蒿蹊(ばんこうけい)が1779年著した『近世崎人伝』によりますと、「崎人とは外見を飾らないが、内に深く蔵するものがある。心の赴くままに生きているようであるが、少しも周囲の平和を乱さない。格別それで自分を縛ってもいない。才芸に勝れていて、それで豊かになれるのにその気を起こさない。いかにも朴訥に見えるが決して愚かではない。」

伴蒿蹊による崎人の例

- 儒学者 中江藤樹 貝原益軒
- 国学者 本居宣長
- 哲学者 三浦梅園
- 蘭学者 杉田玄白
- 画家 伊藤若冲 池大雅
- 作家 上田秋成

将軍吉宗政権の成立後、享保の改革により

- ①江戸近郊の再編、武蔵野新田の開発
- ②人材の登用で大岡忠相を江戸町奉行に抜擢
- ③アーカイブ政策として公文書の管理確立
- ④漢訳洋書輸入の禁を緩和し西洋の「知」入

吉宗の死後も田安家 一橋家により、学芸の研究を奨励しました。シーボルトの影響もありましたが、洋学(蘭学)、医学の研究が進み、自由な文化活動が興りました。

文化活動の担い手になった人材は太田蜀山人、杉田玄白、平賀源内、山東京伝、渡辺華山等々あらゆる階層から多士済々輩出しました。

19世紀 江戸の街は100万の人口を擁し、世界有数の都市となりました。町人を主体とした享楽的な文化は円熟の時を迎えておりました。町人出身の山東京伝は「草双紙」「黄表紙」と呼ばれる出版物を発行し、又北尾政演の画号で浮世絵師としても突出し、文芸、娯楽界の寵児となりました。

代表作は

『一百三升地獄』 豪傑 朝比奈三郎義秀がサツマイモやサトイモなどが墮ちる「芋地獄」を探訪するというナンセンスな物語

『小野篁地獄往来』 「小野篁が六道の辻から地獄に入り、すっかり腑抜けて墮落しきった地獄を巡検するという内容。獄卒たちは町人風の装束で、浄玻璃の鏡(地獄の閻魔王庁で亡者の生前における善悪の所業を映し出すという鏡)はすっかり曇り、地獄の釜も開いたままという有様であった。このやる気のない地獄は寛政の改革ですっかり不景気になり、気力を失ってしまった世間を揶揄した表現と指摘されている。」



『地獄絵ワンダーランド』(NHKプロモーション、2017年)より引用。 ※衣服の「地獄絵」に注目。